親のしつけに感謝

～我が家の防災教育はとてもシンプル～

（宮古市 60代 女性 元校長）

私たち６人姉弟は、地震が起こるといつも、「地震だ、逃げろ！それー」って、ランドセルを背負って近くの山に逃げました。ランドセルが空っぽだからと教科書をとりに行こうとすると、「絶対に戻るな！」と言われました。

夜は公民館へ逃げました。真っ暗でも着られるように服をたたんで順に枕元に置いて寝ること、すぐに外へ出られるように玄関の靴を揃えておくことが我が家の決まりでした。

東日本大震災の日も、迷わず逃げることを選びました。地震が起きたのは５時間目の授業中。校舎がメキメキと揺れる中、生徒を集め、一枚ジャケットを羽おらせ、中学生には小学生を手伝わせて避難しました。

私の両親は昭和三陸津波で家族を失っています。それだけに、子どもたちに津波の恐ろしさを徹底して教えてくれたのだと思います。とてもシンプルな分かりやすい防災教育でした。



津波はまるで大きな川のよう

～大きな木も根こそぎ流された～

（名取市 60代 男性 農家）

津波はまるで大きな川のようになって、畑のビニールハウスやドラム缶、消防ポンプやトラックなどそこにある物すべてをのみこみながら、私たちの目の前をゴーゴーと流れていきました。大木が流されるほどの強い流れでしたからね。近所の娘さんは泳いで何とか助かりましたが、お父さんお母さんは津波の犠牲になりました。

ちょうどその日は、レタスとチンゲン菜の初収穫の日だったのです。うちの奥さんが採った野菜を車に積んで家に帰ったところで、やってきた津波で車は流されました。それから３、４日して、やぶに引っかかっているうちのバンタイプの軽自動車が見つかりました。

車は使いものにならなくなりましたが、野菜を入れていたコンテナは重ねていたので、下の段は泥になっていたけれど、上の段は野菜もきれいでした。で、みんながそれを「野菜がなくなったから」と言ってもらっていきました。うちは野菜中心の食事ですから畑がやられるとどうにもなりません。当時は店にも何もなくて大変でした。

海から３キロも離れているこの地域にまさか津波がくるとは思ってもいませんでした。あれから２年半、震災当時の苦労話をしても、ここから少し離れた駅周辺は全然被災していないから話が合いません。もう風化しつつあるんです。



豪雨への備えにヌカリあり

～過去の災害教訓を活かせず～

（宇治市 60代 男性 地区役員）

後で知ったんですけど、その当時のレーダー画像は真っ赤な雲がピンポイントでバーッと押し寄せてきていたんです。私もたいがい雨雲レーダーを見てるんですが、前日に畑で捻挫してしまい、早くから寝ていたのです。

雨があまりにきついので、夜中の３時ごろから起きていました。その雨雲が２時から３時くらいに押し寄せるというのが分かっていたら、もっと早いとこ指示が出せたのに、「抜かってたな」と思っています。

それと、昭和28年の災害教訓が２つあったことを抜かってました。その年の９月に宇治市が台風でひどい目にあったということだけしか頭になく、「台風が来たら怖いで」と思っていても、今回みたいに寒冷前線が通過して豪雨になるということは「まあ、ないやろ」と。

でも、同じ年の８月15日に南山城水害が発生し、同じような雨雲が来て、雷が鳴りまくり、大雨が降り、堤防が決壊するなどして多くの人が亡くなっていたのです。南部の方の災害で宇治市は関係ないと思い込んでいたというのが、最大の不覚です。

雲なんてきちっと同じコースでくるということはまずないわけですよ。上いったり下いったりして。だから、そういうことがこの時期にあるんだということがわかっていたら、もうちょっと構えることができたんじゃないかなと、残念に思っています。



朝がたの小雨に油断

～台風に比べ危機感少なく～

（奄美市 70代 男性 地区役員）

あの日は全く、大雨の予想はしていませんでした。朝がたは小雨だったものですから、家内と畑でも行こうと言っていたくらいです。台風だったらもっと危機感をもっているんですけどね。

それが午前10時を過ぎて急に猛烈な雨が降ってきて、集落の80%近くが海みたいになって、道路は冠水し、家も全部床上浸水になりました。これは大変よということで、ほとんどの方は公民館に避難してもらいました。

道路が冠水で通行止めですよとか、誰がどこに避難していますよといった情報を地元のFMが放送していましたが、停電でしたから電池式のラジオを持っている人以外は情報が入りませんし、昼間で停電に気づかず全く異常を感じていなかった人もいました。

実際、青年団が避難していないお年寄りの家に行ってみると、「部屋の畳が浮き上がってきて初めて気がついた」と言われました。そういう人たちは青年団の連中におんぶされて避難しました。

降り始めは小雨でしたから、まさかあんな大雨になるなんて、誰も思っていなかったのです。



話し合っておくべきだった避難先

島原市 50代 男性

大火砕流*の際、市外にいたので、「家族は大丈夫だろうか」ということで頭がいっぱいでしたね。避難場所に指定されていた近所の中学校の体育館には、避難できないという情報が入ってきましたので、「そしたら避難場所はどこだろう。どこに行けばいいんだろう」って、車を走らせながらずっと考えていました。

で、とりあえず、市の体育館に行ってみたんです。でも、そこにも家族は見あたらなくて、あわてました。子どもは小学生だし、一番下の子はまだ4歳ぐらいでした。どこでどうしているのだろうかと、心配でたまりませんでした。

それから、交通規制がしかれていないところに親戚があったので、そこに行ってみると、家族全員がいたわけです。ほんとうにホッとしました。

噴火に限らず何かあったときには、どこに行くことにするよとか、家族で避難経路についてよく話しあっておくべきだなと、そのときつくづく感じましたね。

＊火砕流は、高熱の火山岩塊、火山灰、軽石などが高温の火山ガスとともに山の斜面を流れ下る現象で、流下速度は時速100キロメートルを超えることもあります。



一日前プロジェクト

みんなでやってみよう!

簡単な手順を紹介します

まず、過去の自然災害（地震、水害）の中から対象を選ぶ

↓

その災害の被災経験者や災害対応経験者に声をかける

↓

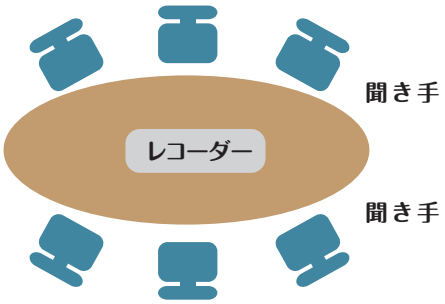
みんなが集う場所と時間を設定する

↓

※所要時間は2時間

なごやかな雰囲気の中で、当時を思い出しながら、体験したり感じたことを話し合ってもらう

※話し手は、2～4人が適当



「教訓」や「知恵」につながる部分を拾い出し、タイトルをつける

↓

テープ起しなどを基に、拾い出した部分を物語にする
※物語は、300～500字程度で、できるだけ切り口を残して編集
※物語の情景をあらわすイラストや写真等を添えると効果的

↓

作成した「物語」を地域や職場のみんなに読んでもらう

気づき　共感　反省

「一日前プロジェクト」とは、地震や水害などの自然災害で被災した方や災害対応の経験をもつみなさまにお集りいただいて、

- 被災前後の行動
- 体験を通じて上手くいったと思うこと、失敗したと思うこと
- もう一度災害が発生したならば、次はどのように行動したいか
- そのために日頃から何を準備しておけばよかったか

といった本音の話をお聞かせいただき、これらの話から導き出されるさまざまな教訓や身につまされる体験をショートストーリー（エピソード）に取りまとめるという活動です。

こうして取りまとめたエピソードを広く活用・普及させることで、地域のコミュニティや国民一人ひとりに、防災・減災への関心や意識を高めていただくことを目的としています。

ここで紹介する物語は、ほんの一部です。一日前プロジェクトから生まれた物語は、内閣府の「災害被害を軽減する国民運動のページ」 https://www.bousai.go.jp/kyoiku/keigen/ichinitimae/index.html に掲載されています。ぜひ、アクセスしてみてください!きっと、あなたの心を動かす物語が見つかるはずです。

■一日前プロジェクトの物語・イラストは、非営利の目的であれば、広報誌やパンフレットなどご自由にお使いいただけます。
「災害被害を軽減する国民運動のページ」（ https://www.bousai.go.jp/kyoiku/keigen/ ）からダウンロードしてください。

発行 内閣府（防災担当）

〒100-8914　東京都千代田区永田町1-6-1（中央合同庁舎8号館）
TEL 03-5253-2111　URL https://www.bousai.go.jp